

古典虎の巻 ～歴史的仮名遣いの読み方～

★その一 歴史的仮名遣いの読み方 ルール確認

①語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に変える。

・にはかに→にわかに ・いにしへ→いにしえ (練)あはれに ()

②「ゐ・ゑ・を」は「い・え・お」に変える。

・ゐたり→いたり ・をかし→おかし (練)こゑ ()

③「ぢ・づ」は「じ・ず」に変える。

・なんぢ→なんじ ・よろづ→よろす (練)いづれ ()

④「ゑむ」は「ゑん」に変える。

・行かむ→行かん (練)とらむ ()

⑤「くわ」は「か」、「ぐわ」は「が」に変える。

・くわじ→かじ ・にんぐわつ→にんがつ (練)くわいせんせい ()

⑥「au」「iu」「eu」の母音は「ô」「yu」「yô」に変える

・やうやう→ようよう ・あやしう→あやしゅう ・けふ→きょう ()

(練)かふしちう|がつかう→()

★その二 二十問チャレンジ

①まうす ()

() ⑧ぢごく

③ゐなか ()

() ④やむごとなし

⑤きうしう ()

() ⑫くわかく

⑭ゆゑ ()

() ⑯わざはひ

⑯あふぎ ()

() ⑯けふ

★その三 文中の歴史的仮名遣いをひらがなで現代仮名遣いになおそう！

①梅はにほひあれども、色ことならず。

②祈り直し侍りと言へり。

③ただ一人、徒步より詣でけり。

④若き女のなんとも物をばいはずして

⑤世をうぢ山と人はいふなり

チャレンジー 古典作品を読んでみよう!

今回は、皆さんが知っている昔話の中から、「浦島太郎」を古文で読んでみましょう。実は浦島太郎は室町時代に成立した『御伽草子』の中に登場しているのです。「昔話」と言いますが、本当に遙か昔の作品なのです。今回学習した歴史的仮名遣いの読み方を使って、「浦島太郎」を読んでみましょう。) の中には傍線部の言葉を現代仮名遣いに直したものとひらがなで書きましょう。

()

昔丹後国に、浦島といふもの侍りしに、その子

に浦島太郎と申して、年の齢二十四五の男有りけ

() ()

り。明け暮れ海の※うろくづをとりて、父母を養ひ

() ()

けるが、ある日のつれづれに、釣をせむとて出で

() ()

にけり。浦々島々、入江々々、至らぬ所もなく、

() ()

釣をし、貝を拾ひ、※みるめを刈りなどしける所

() ()

に、※ゑしまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げ

() ()

ける。浦島太郎此亀にいふやう、「汝、生有るもの

()

した。

の中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきも

のなり。忽ちここにて命をたたん事、いたはしけ

() ()

れば、助くるなり。常には此恩を思ひ出すべし「

() ()

とて此亀をもとの海にかへしける。

※うろくづ…魚のこと。※みるめ…海藻の名前。

※ゑしまが磯…絵島ヶ磯。磯の名前。

どうやら、古典作品の浦島太郎と私たちが知っている浦島太郎は、少しストーリーが違うですね。続きを読む今度!